

2016年9月25日

## 福音書からのメッセージ

この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。

(ルカによる福音書 16章 20～21 節)

今日のたとえにはまず、二人の人物が出てきます。金持ちとラザロです。金持ちの描写はこうあるだけです。「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」。金持ちは高価な衣服を常に身に着けていたようです。そして毎日贅沢に派手な生活をしていました。しかしこの金持ちの行動は、このたとえを聞いている人たちにとっては何の違和感もないことだったと思います。

といいますのも、神さまが祝福して下さることと財産が増えることとは、ほぼイコールのこととして捉えられていたからなのです。家畜が増えたり、土地を得たり、豊作になったり。それはすべて神さまが祝福を与えてくださったからだと考えられていました。だから金持ちが富を得たのは神さまの祝福の結果だから、どんなに贅沢してもいいのです。つまり神と富とは同じ方向にあると考えていたのですね。ところがイエス様は、それを真っ向から否定しました。神と富とに仕えることはできないと言い切ったのです。

ファリサイ派の人たちは嘲笑いました。周りで聞いていた人たちも、同じ考えを持ったことでしょう。その中でイエス様は金持ちとラザロのたとえを語られるのです。

贅沢に生活していた金持ちとは対照的に、ラザロは飢えていました。金持ちの門の前に放り投げられ、残飯でもいいから食べたいと願っていました。でも彼のそばに金持ちが来ることはなく、来るのは自分の



体のできものを舐める犬だけでした。ラザロがこのような状況になったのは神さまの怒りを買ったから

らだというのが、当時の人々の考え方でした。彼は何か罪を犯したに違いないと考えたのです。

しかしこのような考えを、イエス様は見事に覆されます。イエス様は語ります。二人が死んだあと、ラザロは天使たちによってアブラハムのすぐそばに連れていかれたと。そして金持ちは、陰府でさいなまれていました。立場が逆転したのです。人々の思いとは全く逆のことが神の国では行われると、イエス様は伝えられたのです。

ラザロという名前、それは「神は助ける」という意味です。神さまが助けてくれないと生きることができない、神さましかもう頼れない。それがラザロなのです。わたしたちは金持ちのように、ラザロの存在に目をやらずに生きていくのでしょうか。それとも扉を開け、ラザロの元に駆け寄り、共に生きていくのでしょうか。わたしたちがラザロと同じ視点に立った時に、わたしたちの目にもイエス様という希望が見えてくるのです。神さまはそのようなわたしたちを、必ずみ許に引き寄せてくださいます。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>